

# 夏草の線路

松崎 武志

私が鉄道旅行を始めて今年で 18 年になる。この夏も部の生徒を引率して、久々に飯山線と只見線に乗ってきた。旅の始まりはムーンライト信州 93 号であったが、車窓から夜景を眺めていると、頭の中にある歌が流れてきた。

♪夏草に埋もれた線路は 錆びた陽射しを集めて 立ち止まる踵(かかと)を 知らない町に誘うよ  
霧の朝いちばん最後の 貨物列車に託した 僕たちの遙かな未来は 走り続ける  
何時までもこの場所で 同じ夢 見てたはずなのに 君は今 靴紐気にして

その歌は、遊佐未森（ゆさ・みもり）の『夏草の線路』であった。

高1の春、大垣行き夜行電車（以下、大垣夜行）を使って広島に日帰りして以来、鉄道旅行の魅力にすっかり取り憑かれた私は、高2の夏休みに鉄道研究同好会の同級生だった梅本君とともに、上諏訪行き夜行電車（以下、上諏訪夜行）に乗って旅行をした。一旦上諏訪まで行ってから小淵沢に戻り、小海線に乗り JR 最高地点を目指すという旅だった。この上諏訪夜行は、当時は毎日運転されていた。現在の夜行列車のように全席指定では無かったため、気軽に乗れた半面、座席を確保するにはかなり前から並ばなくてはならなかった。

1990（平成2）年8月1日。この日は高校の登校日だったので、一旦自宅に戻って、久留里線・内房線・総武線・中央線と乗り継いで、19時頃新宿に着いた。私は22時前から並べ大丈夫じゃないかと思ったが、旅慣れている梅本君の提案にしぶしぶ従い、5時間前から並ぶことになった。上諏訪行きの入線するホームに行くと、待っている人はほとんどいなかった。反対側のホームに中央線の上り電車が次々到着しては発車する中、当時新宿駅が独自に製作していた発車メロディーを録音したりしつつ、ひたすら座って待っていた。そのうちホームのあちらこちらには、人が列をなして座り始める光景が見られるようになった。

23:30頃、上諏訪夜行が入線してきた。大垣夜行は上り・下りがあり165系車両が運用されていて、まだ長距離利用者に配慮されていると感じたが、上諏訪夜行は下りのみで、しかも115系車両だった。新宿を0:01に出発し、5:46に上諏訪に到着する、登山客のための列車だった。そもそも新宿－上諏訪間は特急を使えば所要時間は2時間半前後で、夜行を設置する距離では無いため、大月で30分、甲府では1時間停車した。上諏訪夜行はその後のダイヤ改正で、大月を1分停車にする代わりに、甲府で1時間半余り停車するようになった。

定刻通りに発車した上諏訪夜行は、新宿を9分後に出発する中央特快を高尾で待ち合わせるため、藤野辺りまでは混雑していたが、大月までにはかなり空いてきた。18きっぷを使用していたので、大月や甲府、小淵沢での長時間停車の際には乗り降りは自由だったが、床に

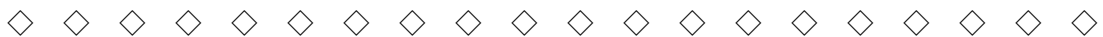


泉岳寺まで行ってほしいとは望まないが、朝の通勤時に 10 分近く待たされるのは精神衛生上よろしくない。

余談だが、一度品川止まりの 2100 形快特に乗ったところ、寝過ごしてしまい、そのまま引き込み線に入ってしまったことがあった。いずれ品川始発の快特になって下りホームに入るだろうと思っていると、車掌がやってきて「ドア脇のボックス座席に移動してお待ち下さい。」と言われるままに移動すると、真ん中のクロスシートが自動的に逆向きになった。引き込み線で見られない、貴重な光景だった。

私よりもはるか昔から京急を利用して通勤している古参の教員に、東急線との違いや不満・惨状を訴えると、「京急は羽田空港線を中心にダイヤを編成している」「普通電車しか止まらない、特急通過駅はどうでもいいと思っている」と話してくれた。

かつて鉄研でも「KTQ」と称して、京急と東急を比較研究したことがあった。その頃はまだ京成線の青砥に住んでいたため、東急や京急には無知であった。反町のことを平気で「そりまち」と読み、部員に失笑を買ったこともあった。しかし、両者の沿線に住み、実際に利用することで見えてくる虚像と実像がある。京急の一方的な礼賛にはアンチテーゼを持ちつつ、今後も研究していきたい。



今年は十名以上の中一生徒が鉄研に入部し、部員数はついに 30 名を超えた。高輪には運動・文化系合わせて 30 以上のクラブおよび同好会があるが、30 名以上の部員を抱える団体はそう多くはない。文化系に限定すればトップクラスではないだろうか。

ただ部員数は繁栄の指標にはならないと、私は考えている。むしろ私が感慨深いのは、中一から高 3 まで全学年に部員がいることである。顧問になってから 9 年目で初めてのことである。学年によって部員数に偏りがあるのは事実だが、少数でも全学年に部員がいれば、少なくともあと 6 年は存続していけるし、活動方針や技術・知識が伝承されていく。

現在の高 3 部員は 3 名だが、三者三様だった。しかし、3 人それぞれが個性を発揮し、活動に参加し続けてくれた。引退後も時々顔を出してくれた。後輩たちのために自らのルールを、大量に貸与してくれた。顧問が学年の教員だからという理由で入部する傾向はどこの学校でもどこの部でもあると思う。しかし、私が授業に全く携わらなかったにもかかわらず、彼らは純粹に鉄道に、そして鉄研の活動に魅力を感じて、活動に参加してくれた。

6 年間、本当にありがとう。今後も視野を広げ、独自の視点から幅広い『旅行・鉄道研究』を続けていって欲しい。